

頼りたくても頼れない青年の心理メカニズムについての検討

—見捨てられ不安、親密性の回避、自尊感情との関連から—

三 浦 愛 理

本研究では、依存の適応的な側面に焦点を当て、頼りたくても頼れない青年の様相について検討した。大学生・大学院生に対して、依存欲求と依存行動を別々の概念として尋ね、親密性の回避、見捨てられ不安や、自尊感情の側面として本来感、自己価値の随伴性との関連を検討し、「頼りたくても頼れない」ことの要因や、適応への影響、その性差を明らかにすることを目的とする。

依存欲求と依存行動の高低により群分けをし、分散分析をした結果、情緒的依存に関しては、「頼りたくても頼れない」人は「頼りたいときに頼れる」人より、親密性の回避、見捨てられ不安が有意に高かった。また、道具的依存に関しては、女性においてのみ、「頼りたくても頼れない」人が「頼りたいときに頼れる」人より自己価値の随伴性が高かった。次に、親密性の回避、見捨てられ不安を説明変数、依存欲求と依存行動を基準変数とした重回帰分析を行った結果、親密性の回避は依存欲求、依存行動に負の影響、見捨てられ不安は依存欲求、依存行動に正の影響があることが示された。また、依存欲求、依存行動を説明変数、本来感と自己価値の随伴性を基準変数とした重回帰分析を行った結果、女性においてのみ、本来感に対しては依存欲求が負の影響、依存行動が正の影響を及ぼしているのに対し、自己価値の随伴性に対しては、依存欲求が正の影響、依存行動が負の影響を及ぼしていた。

以上より、情緒的依存欲求が高く情緒的依存行動が低い人は、親密性の回避、見捨てられ不安が高いこと、女性においては、道具的依存欲求が高く道具的依存行動が低い人は、自己価値の随伴性が高いことが示された。したがって、他者との親密な関係を回避する傾向や、関係が壊れることへの不安が強い場合には、情緒的な関係を求める依存欲求が高くても、実際に依存行動として表出することが難しいようである。また、男性では、頼れないことが自己価値の感覚にあまり影響しないのに対し、女性では、頼れないことが本来感の低さ、自己価値の随伴性の高さに影響することが明らかになった。女性においては、情緒的、道具的に依存行動を表出できないことによって、自分らしく居られる感覚が低下することが示唆された。